

コンサルテーション事業報告

事業名 重複障害児・者コミュニケーション支援

事業代表者 川住 隆一 (人間発達臨床科学講座)

対 象 重複障害児・者、重複障害児・者の家族、重複障害児・者が在籍する学校の教師、関係機関職員

目 的 重複障害児・者と周囲の者とのコミュニケーションが成立・展開することを目標として、各々の生活の場や活動の場におけるコミュニケーションの機会と方法の開発を行うことを目的とする。また、このための周囲の在り方について、保護者や教員、福祉・療育機関職員とともに探っていく。

主なスタッフ 川住隆一および川住研究室指導学生

東北大学大学院教育学研究科：笹原未来・野崎義和・佐藤真理
東北大学教育学部：梁 宝婪

実施内容

(1) 教育相談として対応している事例 (6 事例)

6 事例は、盲ろう (障害者通所施設在籍)、肢体不自由 (障害者通所施設、特別支援学校小学部・高等部)、あるいは重度知的障害 (障害者通所施設、養護学校高等部) を有している。各々月に 1 度位の割合で保護者と共に来談しており、筆者らの研究室やプレイルーム等で対応している。全員がコミュニケーションの発信・受信手段やコミュニケーション内容の拡がり为目标であるが、その他に、楽器や玩具の操作行動、絵画の表現行動の広がりも大きな課題である。1 例については大学院生が定期的に家庭を訪れて支援活動を継続している。

本年度は、この内の 1 事例についてコミュニケーション支援に関するセミナーにおいて話題提供を行うとともに (川住, 2010)、他の 1 事例の経過について、日本特殊教育学会大会および教育学研究科年報にて発表した (笹原・川住, 2010a, 2010b)。また、本事例に関する実践研究が「特殊教育学研究」誌第 49 巻第 1 号 (2011) に掲載予定である。

(2) 障害者通所施設の要請で対応している事例 (1 事例)

コミュニケーションの観点から療育内容の充実を図っている障害者通所施設とそこに

通所している重度障害者の家族の要請を受けて、施設生活の中で取り入れられるコミュニケーション手段について検討してきた。合わせて、食事行動の支援方法についても検討を行った。

(3) 病院・施設に長期入院中の事例（6事例）

われわれはこれまで、国立病院重症心身障害児病棟に入院していて、発信手段に大きな制約はあるものの言葉の理解力が比較的高い成人の方々に対し、当事者間相互のコミュニケーション支援を実施してきた。一昨年度からはこのうちの1名について、パソコン操作による文字でのコミュニケーション支援（文字習得・単語構成・短文作成・話題伝達の促進）を実施したり、コミュニケーション自体を目的とした支援を行ってきた。また、昨年からは保護者と看護スタッフの要望を踏まえ、ウェルドニッヒ・ホフマン病児1事例へのコミュニケーション支援（コミュニケーション意欲の促進・支援機器操作・文字学習ソフトの導入）を行っている（佐藤真理，2011）。

さらに重症心身障害児施設に長期入所中の子ども3例を対象に、語りかけ場面におけるコミュニケーション行動に着目した取り組みを一昨年度と昨年度実施した成果をまとめ、日本特殊教育学会の大会において発表した（新谷・川住，2010）。

(4) 学会報告等

川住隆一（2010）セミナー2「保護者が求めるコミュニケーション支援『医療的ケアが必要な子の親として学校・相談機関・大学に期待すること』」における話題提供．第7回楽暮プロジェクト・セミナー「特別支援教育における支援機器の活用～障がいの重い子どもたちへのコミュニケーション支援を中心に」（2010.9.5，仙台市福祉プラザ）

笹原未来・川住隆一（2010a）Rett 症候群者の接近行動の様相からみた係り合いの展開課程—接近行動の発現対象とその後の行動展開に焦点を当てて—．日本特殊教育学会第48回大会発表論文集，674．

笹原未来・川住隆一（2010b）Rett 症候群者における接近行動の展開過程．東北大学大学院教育学研究科研究年報，59(1)，239-253．

佐藤真理（2011）ウェルドニッヒ・ホフマン病児のコミュニケーション拡大に関する研究．平成22年度東北大学大学院教育学研究科課題研究論文．

新谷千尋・川住隆一（2010）視覚障害を伴う重症心身障害者の話しかけ場面における聴性行動の促進に関する研究．日本特殊教育学会第48回大会発表論文集，411．